

せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五十八号（一日発行）
平成六年七月一日

北海の古平風土物語 二四

南部大黒と津軽へソトコ（下）

担任・千葉信夫先生（二十二歳）

高橋源五

じさま、ばさま、お父（ど）さん、お母（が）さん、あんちや（兄）、おんず（弟）、嫁コあねちや（女の子）、わらさんど（子供たち）が大勢集まり、広く開け放した部屋にいっぱいになった。

四十歳を越えたと思われる二人の大黒さんは、大きな柄模様のつっぽ袖の上衣、だぶだぶで太く永いモンペに履き代えて、手首や腰のあたり、ひざ下などをひもで締めつけて、すっかり太ったかっこう、描いた顔、頭には大きな大黒ずきんをのせて姿を現した。

神棚に大黒絵紙を貼りつけ、お神酒やお洗米、山海の産物、それに持参した金ピカの、宝槌（つち）を供えてお灯明を上げた。

その前に並んで、皆で、今年
の鯨大漁を祈願した。

それが終って、いよいよ、唄
いと踊り手、一人と、つづみ打
ち（囃）はやし方、一人の二人
組で、本番が開演となるのであ
る。

金ピカ宝槌を振りながら、
所作おもしろくやる。
「南部大黒万歳、数え唄」「南
部豊年踊り」「南部大黒舞」な
どを、全く純粋な南部弁の口
調でやり、また身ぶり手ぶりの
所作がおもしろかったのて、拍
手と笑いが止まらなかつた。

集まった連中は、ぶら下げて
来たわが家自慢の鯨漬、菜漬、
干魚の煮付け（かれい・たら・
身欠鯨など）などをひろげた。
家からはりんど・みかん・南部

土産のゴマ塩せんべいを盛って
並べ、皆でお神酒や甘酒を注ぎ
合って飲み食いする。調子づい
て、国もと（旧南部藩領で、主
に戸から九戸郡、伊閉郡）の
話に花を咲かせている。

二人の大黒さんも大もてで上
機嫌、皆のところを祝杯を持っ
て廻る。こうして国もとの南部
郷土芸能に浸りながら、雪にう
ずもれた古平での冬の夜が過ぎ
ていく。

南部大黒夜鍋会は遅くまで続
いて、めでたく散会したのであ
った。年寄りたちの五、六人は
泊まって翌日に帰って行ったの
だ。

●ホロベツの浜の魚

はカムイの使いか
東蝦夷地シコツ場所のホ
ロベツという浜に、先年
異様な形をした魚が揚が
った。長さ四、五ヤ、
幅〇・五メートルで、目
は大きな茶わんぐらい、
口はつぽのようであらうこ
が無く、色は銀色に光つ
て頭はウグイのようであ
った。アイヌの話によれ
ば、「これは川や沼に住
む魚であるが、海のカム
イの所へ使えに行つたの

だった。

× × ×

大黒さんの二人は、三、四日
家に泊まって、古平に移住して
来た国衆や町家の門付けに廻っ
て歓待された上、手土産にと、
干魚や小豆・金時豆などをどっ
さり貰って大喜びであった。

「親方、松前の古平つどごアえ
えどごなア」
「どもども」、「あんさまたづ
（達）、らいすん（来春）まだ
きす（また来ます）」

南部弁でおもしろいことを言
い残して、土産でふくれた大黒
袋を担いで去って行った。

であろう」とのことであ
った。御用船政徳丸の船
長沖右衛門もこれと似た
ものを見たという。

●リシリ浜の異変

同じく沖右衛門が、曹谷
へ行くのにリシリの港に
寄った時、異形な魚を見
た。うろこを立て、頭は
絵で見る竜のようで、色
は黄色でチョウザメに似
ている。うろこはカラカ
ラと音がして、口の回り
には針のようなひげが生
えていたという。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

政局混迷 トロトロの権力争奪戦

今も昔も変わらぬかも知れないが、テレビ情報のゆき届いた夕せいか、新聞活字より鮮明にして人間の見にくさがクローズアップされる。ある生徒が、まるで猿社会のようだと書いていたが、子供心にも異様に映るのかも知れない。代議士先生方よ、口を開けば国家、国民のため云々！ なんとむなしこのとよ。これはなにも代議士先生

故郷を想ひ 福井孝平

の社会だけでなく、議員と名のつく地方にいたるまでかようなものだとは推察できる。情けない話ではないか。人の上に立つお偉方さんよ、正しく清く、世のため人のため、もっと真剣に奉仕していただくことを望む。ここまで一気にペンが走ったら少しさっぱりした。書くことは大変なことだが、ストレス解消にもなる。ワッハッハ：：。
人間の短い一生、そんなにむづかしい哲学はいらない。もつ

と満たされた生き方があると思う。清貧に甘んじるとは言わないが、ほどほどに、人それぞれの小さな助け合う社会が常識でなければならぬと思うが如何。年をとると己そのものの生きざまが反省できる。世間は広い。立派な、感動を呼ぶ、尊敬のできる方もたくさんいらっしゃることも事実である。
さて政局の行方はいかに？ 選挙民の一人として無関心ではられない。機会があったら、だまされぬよう一票を投じるつもりでいる。一人一人が真剣に

悪玉を追放しない限り、世の中が美しくならないのだから、あきらめずに直接、間接に町政、道政、国政に参加し続けましょう。無関心ではいられない。「せたかむい」のご愛読はもちろん、投稿もよろしく。遠慮なく町の古い話などお聞かせください。



古平場所と岡田家

約二百年前の古平場所

天明年間(一七八五年前後)の古平郡の主な建物	アイヌ語地名	運上屋	番屋	鯨小屋	アイヌ小屋	計
ヘロカライシ	四	二	二	二	五	九
リキシユマ	二	二	二	二	二	一四
モヤシヤム	二	二	二	二	二	一四
メメタライ	二	二	二	二	二	一四
チヨヘタナイ	一	二	二	二	二	一四
ヲヲカフ	一	二	二	二	二	一四
メナシトマリ	一	二	二	二	二	一四
オタスツ	一	二	二	二	二	一四
チロンナ	一	二	二	二	二	一四
ラルマキ	一	二	二	二	二	一四
合計	一	二	二	二	二	一四
隣り合っている余市・美国郡の状況は、	三四	八	一	八	五	二
余市郡	二	二	二	二	二	一四
美国郡	一	二	二	二	二	一四
それから七年ほど後の寛政四年(一七九二)の場所状況をみると、	三四	八	一	八	五	二
フルヒラ 新井田喜内知行所	六六	一	一	一	一	二七
請負人 松前 恵比須屋治助	九	一	一	一	一	二九
下代 武兵衛	八十六人	一	一	一	一	二七
小判(運上金) 三百両	八十六人	一	一	一	一	二七
(アイヌの役職)	八十六人	一	一	一	一	二七
乙名 コヤシヤ	八十六人	一	一	一	一	二七
脇乙名 イナウシ	八十六人	一	一	一	一	二七
小使 トンプク	八十六人	一	一	一	一	二七

家数(アイヌ) 四十三軒
人数(同) 八十六人

なとなつては、
當時は、鯨漁のころになると和人が「二八取り」として大勢が出稼ぎに来るが、漁場では越年させなかつた。なによりも冬期間の食料の確保が十分でなかつたことと、アイヌとの間でもめごとの起ることを心配してのことだった。

馬に思い出を寄せて

池田 テル

先日の、捨てられた一歳のライオンが拾われて元気でいる、とのニュースに胸をなで下ろしました。

昔は、この町にも馬がたくさん飼われていて、どこへ行っても馬を見かけたものです。荷を引く馬、人の乗る馬、農耕する馬など。そして春ともなれば、生まれて間もない子馬と連れ立った親子の姿が見られました。

昔の暮しは、家屋をはじめ、洗い桶からしゃもじまで木で作られていましたし、暖房も薪で作したから、木材の切り出しや運搬には、馬は無くしてはならないものでした。

古平のお祭りの賑いは今もよく知られていますが、昔はもっと盛大で、神輿を担ぐ若者や、奴行列の威勢のよいかけ声は今でも心に残っています。神主さんの近くには「ぬさまい」を背に立てたりつばな馬がいて、飼主らしい人が静かに手綱を握っていました。馬と共存のような時代ですから、競馬・鞍馬競技

があつて、馬の飼っている家では、その日はお祭りのようなご馳走を作っていました。

馬はとても従順で、またよく働きました。

忘れられないのは昭和初期、国の内外で戦争のあつたころのことです。稲倉石鉱山から多くのマンガン鉱石が送られました。それが山から海岸の貯蔵所

まで運んだのも馬です。重い鉱石を積んで、十二キロ余りの雪道を吐く息も荒く、汗びっしょりになって、あえぎあえぎ馬そりを引いて行く姿です。毎日一回二十台ほどが列になって私の家の前を通つたので、その時の馬をほんとうに哀れに思ったものです。

ひづめ跡ふかく刻める雪の道
足落さじと来れば疲れき
馬の糞は、そのまま道にたまってゆくのですから、特に春近いころの雪道は、人も馬も大変でした。

私が一年生の冬の、ある雪の止んだ夕方のことでした。親戚の家から、手に余るほどの風呂敷包みを持って家に帰る途中、後から馬そりの鈴の音が近づいて来たので、道をよけて立っていたら、手綱を持っていたどこかのおじさんが「乗れや」と言つて、私の手をとつてその馬そりに乗せてくれました。家の前で下ろしてもらつて別れましたが、その時の馬そりの乗り心地と、親切なおじさんのことを、テレビに映る馬を見ても懐かし

く思い出しています



禅源寺境内「野村泊月句碑」

昭和二十七年九月二十日
建立者・水 見 悠々子

禅源寺の山門を抜けてすぐの参道右側に、円い仙台石をはめ込んだ自然石の句碑が建っています。

蝦夷の古都

古平濱の盆の月 泊月

昭和五年七月、すでにホトトギス派の俳人として知られていた野村泊月が、古平に立ち寄りしました。ちょうどそれは、当時古平に二三あつた句会がまとまつて『古平ほととぎす会』(会

長・水見悠々子)が結成された年でもありました。

泊月は町内のほととぎす会の会員らと、古平・美国を歩いて句を詠み、新地町の越後屋旅館で俳句についての話をしたり、会員の話についての批評などをしました。その夜は、浜町の吉井旅館に一泊して翌日帰りました。古平に来町した時に詠んだ一句がこの句でした。

泊月の来町は、古平の俳句を愛好する人たちに大きな刺激を与えました。新聞の俳句欄や俳誌に投稿する人が増え、また入選する人が続きました。

町内の俳句の興隆に貢献したことに感謝しながら、泊月の古稀を祝つて建てられたのです。

野村泊月(日本名勇、明治十五年兵庫県に生まれ、昭和三十六年二月十三日没

昔の浜の面影

渡辺ハツエ

「光陰矢の如し」とか夏至も過ぎて、早や半歳の月日が流れてしまいました。夏本番、北国にもいよいよ海水浴シーズンが到来し、子供たちは夏休みに入る

すことでしょうか。振り返って見ると、昔は、道路をはさんで家の前が海岸でした。子供たちは、日没も気にならないで元気に泳いでいたものです。ツブを採り、カニを捕まえ雑魚を釣つてと、すばらしい自然環境の中で育ちました。家の磯舟も浜に巻揚げておいて、主人は家の前浜から漁に出ています。舟の揚げ下げにスベリ板を使うのですが、それを子供たちは浮輪代わりに使っているので、夜、波が出ると流され

てしまい、朝になって出漁の時に困ったことも、今では懐かしい思い出となっています。

昔は、ウニを採っても今のような厳しい規制もなかったので平気で、樽をひもで体にくくりつけ、水中目がねをかけ、鉄で作ったカギを使って採っていたものでした。

主人たちが釣ってきたイカはきれいな海水で洗い、天日で干してスルメにしましたが、これは実においしかったです。イカを半

干しにして焼き、しょう油をつけて食べるとこれもまた最高の珍味でした。

今は、前浜も護岸工事で埋められてしまい、海にはテトラポットがあつて、子供たちの慣れ親しんだ故郷の自然の海水浴場が永久にかえって来ないのではないかと思うと、無性に寂しくなってきました。今年は、子供たちにとつてすばらしい夏休みであつてほしいものと願っています。

【今日はこんな日】

種田道議選で連続当選

富太郎の不振から
古平を引上げろ

[昭和3年]

古平町に深いかかわりをもつ種田家は、九州の武家の出身であり、古平場所請負人であつた岡田家から、明治二年、漁場の権利を譲り受けた港町・種田徳之丞は本家筋に当たる。一方、入舟町に漁場を開いた種田幸右衛門は分家であるが、三人が代々幸右衛門を名乗つていて、二代目幸右衛門の次男が銀作―富太郎―豊太―繁子と続いている。

富太郎は、銀作の長男として明治四年八月二十日上磯町で生まれ、その後、父と共に古平町入舟町二十三番地に住んだが、本宅が上磯町にあつたので、入舟町の家は、種田家の建物としては特に目立つようなものではなかつたという。古平のほか室蘭・樺太などにもいくつかの鯨や鮭の漁場をもち、大正八年九月、樺太から鱒の帰りみち、家族や漁夫を乗せ

た船が途中遭難したが、無事生還できたのは日ごろ信心している観世音菩薩のお陰であると、禅源寺に五百羅漢図を寄進したことはよく知られている。昭和三年八月、普通選挙になつて初めての道議会議員選挙が行われることになり、種田富太郎はこれに立候補した。後志支庁管内の定員は四名で、これには次の六名が立候補した。

- ① 田中 信夫 新(民政党)
- ② 種田富太郎 新(政友会)
- ③ 出町初太郎 前(民政党)
- ④ 丸山 信弥 元(政友会)
- 次 藤田 惇一 新(民政党)
- 山内 浪弥 前(政友会)

各党から三人ずつの候補が出て熱戦を演じたが、種田富太郎は三五二四票を得て堂々二位で当選した。これは大正十三年、古平町から初めて道議会議員に当選した大沢吉三郎について二人目になる。

山麓から立候補した田中信夫は三十二歳と若く、議員の年齢による番付表では西(若い方の組)の大関、種田富太郎は五十七歳で東(老年組)の前頭八枚目になっている。種田富太郎は次期も第四位ながら連続当選を果たしている。